巻頭の辞

ムシルル・ハサン
水船教義 訳

世界の古写本の中で、ギルギット写本はインドに現存する最古の写本コレクションである。正典および正典以外の仏教文書からなるギルギット写本は、仏教研究の分野において非常に重要な地位を占め、サンスクリット語、中国語、韓国・朝鮮語、日本語、チベット語での宗教・哲学文献の展開と極めて深い関連を有している。写本の正確な書写年代については諸説あるが、紀元5 - 6世紀のものであるということではほぼ一致している。

これらの写本は、カシミールの、現在のいわゆるパキスタン実効支配地域にあるギルギット地方で三度にわたり発見された。写本の発見はサー・オーレル・スタインが1931年7月24日付『ザ・ステイツマン』紙上に発表し、初めて世の知るところとなった。その報告によれば、英軍のギルギット駐屯所の西方約2マイルにあるナウプル村の丘陵地で、羊の群れの番をしていた少年たちが、一基の仏塔の内部にある円形の一室を発見したというものであった。その部屋には、中央アジアやチベットでよく見られる、おびただしい数の奉納された小型の仏塔とレリーフのほどこされた板があった。この中にあった一つの木箱の中からいくつかの古写本が出てきたというのである。牧童たちは、ジャンムー・カシミールのマハーラージャ（藩王）にこれを届けた。写本が無事に残っていたのは、腐敗や変質に強い白樺の樹皮に書かれていたことと、氷点近くにまで気温が下がるギルギット地方の気象条件などの要因によるものであった。発見された写本の中には、大蔵経の諸経典、特に *Samādhiraśasūtra*（三昧王経）と *Saddharmapuṇḍarīkasūtra*（法華経）（一般に英語で Lotus Sutra として知られる）が含まれている。これらの資料は、グプタ・ブラーフミー、ポスト・グプタ・ブラーフミーという書体を用いて仏教混淆梵語で書かれ、その内容は多岐に及ぶ。宗

教儀礼、図像作成法、民話、医学書、そして生活と知識に関する分野のものである。インドで発見された、おそらく唯一の仏教写本であるという事実が重要である。その言語は、初期大乘經典の言語に類似し、独特な形の混淆梵語である。多くはサンスクリットの語彙でプラークリットの語尾変化をさせたり、プラークリットの語彙でサンスクリットの語尾変化をさせたりしている。

インド文化国際アカデミー理事長で、仏教および南アジアと東南アジアの文化に造詣の深い高名な学者であるロケッシュ・チャンドラ博士は、膨大なギルギット写本の写真版を1974年ニューデリーにおいて初めて出版した。同博士によれば、この写本テキストは三回の仏典結集（仏教長老会議）と関係があるという。とすれば、サンスクリット語の（北伝系の）テキストは、第三次仏典結集がカニシカ王の治世に行われたとしているが、その結集の時期は、カニシカ王の治世（紀元78? - 128年?）の頃か、それ以降ということになる。文献としての重要性のほかに、これらの写本は装飾本の典型としての役割も果たしている。スリナガルにある博物館の収蔵品に最初期のサンスクリット写本があるが、その中の二つは上下を木製のカバーで挟み、そのカバーは両面に彩色画がほどこされ、表側は蓮の渦巻き模様の装飾がある。これらの彩色カバーは、現存する唯一のカシミール絵画の実物なので、情報が全くないこの時期のカシミール美術がいかなるものであったかを我々に教えてくれるのである。

前述の三度の発見のうちで、牧童たちによる1931年の発見がギルギット写本の大部分を占める。スリナガルに搬送された写本は、考古学者サー・オーレル・スタインにより検分された。地元の住民が回収した11葉は大英博物館に送られたが、写本の大部分は現在インド国立公文書館に収納されている。二度目の発見は1938年、パンディット・マドゥスダン・カウルによって行われ、三度目の発見は1956年で、ジュゼッペ・トゥッチ教授が言及している。

遠隔地の宝（Vijānandhi）あるいは写本の宝と呼ばれる、ギルギット写本の大部分は、国立公文書館の管理下におかれ、予備的な修復の後、ラミネートが掛けられ、閲覧は厳しく制限された。インド国立公文書館は文化省に所属し、インド政府の過去の記録文書を保管し、行政官および研究者の使用に供するために、それらの文書を管理している。

写本の一部は、ジャンムー・カシミール州政府の図書館と研究局にあり、断簡は大英図書館とパキスタン・カラチの考古局の所蔵となっている。

写本文書の文法的小および文学的側面については、大いに歴史的興味を引くが、さらに興味をかき立てられるのは、この文書の情報が当時の社会構造の解明にいかに関与したかということである。また、学术界や仏教を实践する人々にとって深甚なる意義がある一方、当時の時代について歴史的に解明を試みる歴史家や言語学者にとっても極めて高い価値をもつものである。この歴史的な文書が公開されることは、わが国および全世界からの切なる要請であった。東洋哲学研究所 (IOP) の献身的な労作業によって新たな写真版の出版が実現し、これらの素晴らしい写本を閲覧し、自由に研究することが可能となった。まことに慶賀にたえない。

この機会をお借りして東洋哲学研究所創立者、創価学会インタナショナル (SGI) 会長池田大作博士、ならびに仏教写本の研究に対する価値ある貢献となったこの写真版の出版に直接間接に関与した方々に、お祝いの言葉を申し上げたい。また、多くの協力者の力を結集して出版を実現された、東洋哲学研究所所長の川田洋一博士をはじめとする同研究所のすべての方々に感謝申し上げたい。

時代を画する今回の偉業が端緒となって、この人類の芳醇な文化遺産が、単に身近なものとなるだけでなく、多くの人々にとって意義あるものとするための、創造と新機軸の思潮を呼び起こしていくことが望まれる。

(Mushirul Hasan / インド国立公文書館館長)

(訳・みずふね のりよし / 東洋哲学研究所委嘱研究員)